

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会記録

平成30年5月9日(月)午前9時59分～午前11時31分(9階908会議室)

○出席委員(11名)

委員長	高木 克尚	副委員長	尾形 武
委員	沢井 和宏	委員	二階堂 武文
委員	鈴木 正実	委員	根本 雅昭
委員	小松 良行	委員	村山 国子
委員	小野 京子	委員	山岸 清
委員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○議題

- 1 行政視察の意見開陳
- 2 その他

午前9時59分 開 議

(高木克尚委員長) おはようございます。ただいまより東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を開催いたします。

なお、ご存じのことと思いますが、地球温暖化防止など環境対策の一環として、今回の委員会から10月末まで、この間ネクタイ、上着の着用は自由といたしますので、よろしくお願いを申し上げます。

早速、先月皆さんに大変お世話になりました行政視察について皆様からご意見をいただきたいと思いますが、江東区、長野市、七尾市で視察内容が異なるために1つずつご意見をお伺いし、その中から今後の意見交換会や提言などにつながるポイントなどについても協議をいたしたいと思います。江東区、長野市、七尾市の順番に皆さんのご意見を集約いたしますが、それぞれに各委員の発言が一巡した後に、出た意見について、今後の調査に向けてポイントとなる点、こういったものを取り上げる項目について整理をするために皆さんから発言をお願いしたいと存じます。

まず、江東区の分からご意見のある方はお述べいただきたいと存じます。

(小松良行委員) 平成28年の7月から東京都はオリパラ教育基本方針を示して、区の教育委員会と連携しながら子供たちをオリンピック・パラリンピック教育東京プランということで進めて、もう第2フェーズに入っているということで、オリンピックが来ることについての経験からという言い方は変

ですけれども、子供たちや市民を巻き込んでの盛り上がりを感じられました。区としてもオリジナルのロゴマークをつくってさまざまな場所に掲示している取り組みや、また部活動、それから国旗、国歌、さまざまな部分で国際理解も含めて教育の現場に取り組みされていること、そして何となく教育の現場にということになると、懸念されるのが今の学習プラスアルファこうしたオリンピック・パラリンピックに対する教育をまたやらなければならないのかということですが、今ある授業の中にもうまく取り入れながらしっかりと取り組んでいるという点に非常に感心をしてきたところであります。本市についてはまだまだこれからということで、非常に焦りも感ずるところではありますが、やはり市民、そして次世代の子供たちを巻き込んで、オリンピック・パラリンピックということをもう少しPRしていく必要が、本当に急いで取り組まなければならないといった思いがいたしたところでもあります。

ほかの方もいるので、以上にしたいと思います。

（沢井和宏委員） 学校に対するカリキュラム上、学年を限定して、この学年にはこんなこと、この学年にはこんなことという、そういう中で無理なく進めていくということはやはり重要であると思います。学校現場としても上から一方的に来るというのではなくて、主体的にどう取り組める、そういう働きかけなり環境づくりなりをしていくのか、そうでないと学校の職員もやはり本気になってやっていく意欲が湧かない部分があるので、そこいら辺をうまく上手に持っていくことが大事だし、子供たちにも伝わることなのだなと思っております。今小松委員が言われたように教科の中とか、大体総合は使えるとは思いますが、テーマとして国際理解とか、そういう部分で物を置きかえながらカリキュラムをつくっていく、そういうのをやはり現場に示しながら、現場でカリキュラムをつくらせるということが大事なのかななんて思います。

（村山国子委員） やっぱり皆さんもおっしゃったようにこのままでいくと、福島市の子供たちはボランティアにかかわったとか、本当に一部の子供たちで終わってしまうような気がするのです。江東区の取り組みというのは、全ての子供たちがかわり、そして体験を通して実感を持って学ぶ、そして主体的に取り組むという、そういうもとで授業の中にも4つのテーマと4つのアクションという中の組み合わせをどうやったら、特別に取り出してやるのではなく、授業の中でやれるかという、そういうあんちょこみたいなのもあったりして、レガシーというとやはり長野の担当者もそうですが、自分はそのときにかかわったのだという、そういう心に残るものだと思うのです。そこを残すのは子供たちの教育なのかなというところで、やはり福島の子供たちも、競技的には少ないのですが、何か本当にレガシーとして残るものをつくってあげる、あげるというのはおかしいのですが、つくる必要があるのではないかなというふうに、そういうふうに感じました。江東区の場合は先生に過度な負担にならないように、そういう視点もありまして、先生任せにするのではないというところがやっぱり重要なかなというふうに感じました。

（鈴木正実委員） 皆さんおっしゃっているとおりのことだというふうには感じます。ただ、非常にわ

かりやすいプランニングになっているのではないか。全員プラン、学年プラン、学校プラン、教科プラン、そしてその中に当てはまらないものでも子供たちが本当に任意で取り組むもの、特別プランという形で仕分けをして、なおかつ子供たちにこどもテーマということで見つめよう！自分、伝えよう！江東・日本と、そういう新たなテーマをきちっと設けて、ここの辺がアクティブラーニングという、今考える子供たちの育成、そういうものの原点になっているのではないかなど。なおかつ今村山委員からもありましたけれども、4つのテーマと4つのアクション、これの組み合わせというのが非常に先生方にもわかりやすい、父兄にもわかりやすい、子供たちにもわかりやすい、非常に工夫されている取り組み方になっているのではないかなど。江東区そのものがかなりの競技数があるということで、早い段階で進まれていたのだということは十分認識いたしますが、福島の場合幸いなのか、不幸なのかわかりませんが、野球、ソフトボールという2競技、これに向けて全学校でどういうふうに取り組むのだというそのあり方は、これからでもまだ間に合うのではなかろうかというふうに思います。まず、学校から種火をおこして、火をおこして、市民にまで広まっていく、PRができる、みんなで情熱を持って取り組めるというその段階に入っていくには、まさに学校教育の中からやっていくのがすごくわかりやすいかなという思いを新たにいたしました。

以上です。

(村山国子委員) 今鈴木委員からもあったのですが、子供が話せば親も関心が出てくるというのは実際あることだと思うのです。親から押しつけて子供にというのはなかなか難しい。子供の中で盛り上がればやっぱり親にも自然に行くというのはあるなと思いました。

(小野京子委員) 今回オリンピック・パラリンピックの教育推進計画ということを経済区立で実施して、このオリンピックをきっかけにどういう人間像ということ最初にある中で、日本人としての自覚と誇りを持ち、みずから学び、行動できる国際感覚を備えた人間ということで、こういうプランが考えられるのかなと思います。先ほど村山委員も言われたように、児童全員が全てやるということが素晴らしいプランだと思ひまして、3番目に世界ともだちプロジェクトという中で、担当した国とか地域について調べるといふことで、国とか自分の地域も調べていくといふ、そういう活動がそこに入っているといふことも、日本も知って国も知っていくといふ、そういうきっかけづくりも素晴らしいなということを感じました。また、ホームページで全校をつなぐといふことで、その中でもほかの学校ともつながれるといふことで、そういう地域、世界のともだちプロジェクトといふのもまたオリンピックならではのプロジェクトなのかなど、この辺すごく感じたところでございます。先ほどもあったようにこどもテーマとか、やっぱり子供にどういふテーマで教育をしていくといふこどもテーマを決めたといふことも素晴らしいことだなと感じました。

以上です。

(渡辺敏彦委員) 小松委員が言ったとおりであります。江東区は、東京オリンピックだから、三十何種目のうち十何種目もやるということになれば、当然意識も高くても当たり前といふような思いがあっ

て、テーマとアクションの組み合わせなのかな。例えば福島はどうなのだとなったときに、ソフトボールと野球1試合ずつだと。それをここで一緒にするのは大変なことだなという思いはあるのね。だけれども、子供たちにこの意識を持ってもらうのは大切だ。ただ、この4つのテーマと4つのアクション以外に、この福島の場合については復興というような部分、逆に見るではなくて見てもらうというような部分もあるのかなと思うので、4つのテーマ、4つのアクションの中に子供たち対象、あるいは大人もそうなのだろうと思うのだけれども、福島の場合はもうちょっと別な部分を取り入れながら取り組む必要があるのかなということを感じてまいりました。30のうち十何ぼもやるのだからね。ということで。

(山岸 清委員) 私は、江東区、あと長野市、両方を見て、ちょっと長野市は違う……

(高木克尚委員長) 今江東区ですから。

(山岸 清委員) 江東区だから、やっぱりソフトと野球なのだけれども、これはみんなそれぞれルールも全部わかっているのだけれども、オリンピック・パラリンピックを通じて世界の中の日本というのかな、今渡辺委員も言ったように福島を見てもらうのも大事だし、みんなそれぞれ子供が世界、日本ばかりではないのだと、その違いを、やっぱりオリンピックを通じてそれぞれの国を理解するというか、福島はスイスがホストタウンかな。よかったなと思っているのです、逆に。韓国とか中国とか台湾とか、政治が動いているところとやったらどうなるかわからないから。せっかく準備したけれども、中止になりましたなんてなったり、いろいろ問題起きるのから見れば、ホストタウンもスイスでよかったのかなと思ったり。だから、その中でこのオリンピック・パラリンピックを通じて世界を十分わかる一つの手がかりにしてもらえば私はいいのかなと感じております。

(根本雅昭委員) 私からは何点かですけれども、今まで出てこなかったようなことをなるべくなのですけれども、まず江東区ですごいなと思ったのがフェーズに分けて取り組んでいるというところ。期間前、第1、第2ですとか、あと第3、大会終了後ということで、このように段階に分けて取り組むということで、開催期間前から、卒業する児童生徒さんもいるかもしれませんが、それぞれに応じて取り組みができるようになってきているのかなということ強く感じました。先ほどから出ていますように学校でできる中で、強制はしないということで、教育現場の意見を尊重しているというところ、これが重要かなというふうに思います。

あと、昨日ちょうど私たち第2班で意見交換会、議会報告会実施したのですけれども、その中でオリンピックに関する質問が1つありまして、スイスとのホスト国交流、これは学校現場の中でぜひ交流、せっかくですので、何かしらの授業ができないかという質問をいただきまして、学校の現場もなるべく早目に決めないところなかなか実施できないのではないかとということでしたので、早目、早目で、例えば江東区でしたら学校の給食の中に世界の料理を取り入れるとか、そういう取り組みされているようですけれども、そういった中で早目、早目の計画が重要なのかなというふうに感じてきた次第であります。

以上です。

(二階堂武文委員) 私も江東区のほうで、オリンピックのほうは12競技10会場、パラリンピックのほうは8競技7会場が予定されているということで、全体の約3分の1の競技が予定されているということで、私ども視察地と挙げてお伺いしたわけなのですが、私感じたのは、江東区は特殊なのではなくて、そんなに肩肘張らなくても、オリンピックを一つきっかけとして子供たちの資質を伸ばそうという、意外とそういった姿勢をいろいろ教えていただいた。特に思ったのは、印象に残った具体的なことですけれども、例えばいろいろなボランティア活動に取り組み、ボランティアマインドの醸成をし、区内の清掃や美化をオリンピックと結びつけられないか検討している。また、学校プランの中で障害者を理解しようということで、車椅子に乗っている方との交流をする。何もパラリンピックの選手を招いてという普通考えそうなことではなくて、車椅子に乗っている方との学校ごとに、幼稚園ですか、交流をして障害者に対する理解を深めましょうというお話もありました。あとは、一流アスリートやその道の達人を招いて、実技を学んだり話を聞いたりということもありました。

私が注目したいのは、このオリンピック・パラリンピックをきっかけに子供たちに特に身につけておいてほしい資質、それを伸ばそうという考え方と、子供たちの未来のために、先ほどありましたね。学校でボランティアマインドの醸成や障害者理解の取り組みをすることによって家庭や地域へ波及させていくというのも2人の方から、議員さんから出ておりましたが、子供たちの未来のための3つのレガシーの形成の考え方、これもとをたどれば実は東京都がおつくりになっている資料として頂戴しましたが、東京都オリンピック・パラリンピック教育の中身に子供たちに特に身につけてほしい5つの資質ということで、ボランティアマインド、障害者理解、スポーツ志向、日本人としての自覚と誇り、豊かな国際感覚とありますが、それを各学校とか幼稚園レベルで、無理のない形で、何も選手を呼ばなければ、これをきっかけに車椅子に乗っている障害者の方を園にお招きしてと、先ほど言ったような形になるのですが、そんな背伸びしなくても、オリパラをきっかけに子供たちの資質を伸ばそうというこの柔軟な発想というか、これというのは何も競技種目が野球、ソフトという限られた福島ではあるのですが、そこに余りにも縛られ過ぎないで、日本でオリパラが開催される2020年に合わせて、どういった子供たちのこれをきっかけとしてというか、これを一つ発奮材料として子供の資質を伸ばそうかと、そういった旗の振り方とか考え方というのを、東京都さんはそこをまとめていらっしゃるから、現場も動きやすいというか、いろんな発想、具体的な行動提案も出てきやすいのかなと、それぞれに出てきているのかなというのは振り返ってみてちょっと感じるころでありましたので、余り背伸びしないで考えていいのだなど。このきっかけを福島で生かす手だてをそれぞれみんなで考えていけばいいのかなというところが一番感じたところです。

(尾形武副委員長) 私も、今二階堂委員もおっしゃったように、野球、ソフトボールの開催が福島市でやるということを契機に東京オリンピック・パラリンピックをいかに子供たちに、それを契機により親しくオリンピックに接せられるような教育の仕方というか、外国の方がたくさん来ますので、オ

オリンピック競技はテレビでリアルタイムに応援もできますし、見ることもできるということで、開催市は、江東区は本当に近くで開催していますから、おのずと問題になるのは不思議ではないのですけれども、やはりテレビなどでリアルタイムに見られる環境にはありますので、そういった意味ではオリンピックを契機に世界の国々と親しくする、そういった手だて、教育も大事なのだなということを手学んできたのかなと思っております。だから、野球、ソフトボールに関しては、やはり福島市内の運動部活動やっているところに日本の選手でも応援といいますか、来ていただいて子供たちと接してもらうような機会があればより盛り上がるのかなと思っておるところでございます。それを契機に熱がまた再び、4年に1回オリンピック来ると盛り上がりますけれども、それをずっと盛んになるような工夫も大事だなと思います。

以上です。

(高木克尚委員長) 皆さんから一通りお話を伺って、大きく分けると、まさに2020年にオリンピックを体験できる子供たちへのさまざまなアクションと、将来にわたって福島の子供たちが障害者に対する意識とかを持てるような持続性のある教育と2通り、皆さんの意見をお聞きすると分かれるのかなと思うのです。どうしてもやっぱり2020年に体験できる子供たちのためにというのが最優先になりますけれども、その先も継続して意識を持っていただけるような教育現場にしてほしいということも我々としては、この特別委員会としては考えなければならないのかどうかということも何かご意見あれば発言いただきたいのですけれども。

(村山国子委員) 江東区でなくて長野になるのですが、一校一國運動というのがあって、今でも続いているってすごいなと思ったのです。そういうやっぱり今言われた、それが継続だと思うのです。その当時の子供たちはもう、今の子供たちは全くオリンピック知らないけれども、一校一國運動によってずっと継続して、そういう取り組みができればいいのかなというふうに、難しいかなとは思いますが、そういう継続性というのものもあるのだなというのは感じました。

(高木克尚委員長) 今後意見交換なんかも予定をしておりますけれども、当特別委員会として協議を進めていく上で、今私が申し上げましたように、今現在いる子供たちが体験できるために何が必要か、将来にわたって福島市の教育現場に残してほしい課題は何か、そんな2方向でちょっと皆さんと今後もお話続けていきたいという方向性はいかがでしょうか。

(小松良行委員) そうなってくると、オリンピックの話、パラリンピック、会場ではありませんけれども、県でボッチャ競技も開催されると、ことしですか。こういった障害者スポーツを通じて障害を持った方に対する理解というのも、これもやっぱり今後に向けてというところでは重要な位置になってくるのかななんてちょっと思いまして、ぜひその部分では今後というところではよろしく願いしたいなというふうに思います。

(高木克尚委員長) 次に、長野について皆さんからご意見をいただきたい。

(山岸 清委員) 長野は、さっき言ったように中国でしょう、ホストタウン。苦勞すると思うな。だ

って、尖閣問題があったときなんか日本の右翼だって騒いで、中国選手帰れなんて騒いだり。これはスイスでよかったななんてほっとした。そのくらいです。

(村山国子委員) 実際に開催した都市ということで、説得力があったなと思ったのですけれども、満足のバロメーター、食事、宿泊、輸送というふうに言われていて、その輸送を福島市が今度のオリンピックで担うというところで、交通規制とかに関しては県が責任を持つのだと思うのですけれども、交通規制とかそういうのは県ですよ。輸送だけ、福島市は。だから、規模が違うのですけれども、テスト的なものをやったりとか、あと渋滞するよという市民への広報とか、1年前ぐらいでしたっけ、随分広報されていたなというのがあって、確かに交通規制とか、通行どめとか、交通誘導とか、信号操作というのは県なのだけれども、市民への広報というのは市の責任なのかなというふうに思った部分と、あと輸送に関して、鉄道を予測していて、西口からの輸送だとは思っているのですけれども、やっぱりパークアンドライドという言葉も出てきたように高速道路も考えなくてはいけないなと思うのです。高速道路といえば即渋滞に関係すると思うのですが、インターそばにすぐにパーク、駐車場をつくって、そこの輸送とかも考える必要があるのかな。来訪者がどれぐらいの予測をしているのかというのがまだ私らもわからないので、長野とはレベルが違うと思うのですけれども、パークアンドライドというのも一つ頭に入れる必要があるのかなというのと、乗せるときは西口でもいいと思うのですが、西口におろしてしまうとそのままだこかに行ってしまうのかなと思うので、東口のどこかまちの中におろして回遊してもらおうとか、そういうのも考える必要があるのかなというふうに思ったのと、あと組織のトップが助役になっていて、組織がすごくしっかりしていて、推進室任せではなく、やっぱり庁内の役割分担を明確にしてやっていく必要があるのかなというふうに感じました。

(沢井和宏委員) 今のに関連して、輸送の部分で、余り表に出ないところで評価をいただいたという長野で、福島としては輸送面と、あとごみのことがあるのですけれども、やはりよくいろんな大会、サッカーの大会で日本人は最後きれいにごみを片づけて帰るといって、ああいう評価も世界的には注目を浴びているところなので、福島市が、ごみが全国1位だということを、そのところの改善も含めて、やはり福島独特というか、ごみの撤去のあり方、福島が独自でできる部分というのを、そういうところ見えなところなのですから、そういうところにちょっと力を入れてみて、ごみの減量化にもつながって、後々もしかするとそういうところに着目されて評価を得られる部分というのはあるのかななんていう感じがしました。

(二階堂武文委員) 今のご意見に関連してなのですが、今の着目点で、福島市が輸送とごみを担当するというところで、この2020をきっかけに、福島はごみ処理を担当するという、これを一つのきっかけとして、ごみ日本一の不名誉な福島を、オリンピックを、2年後を一つのゴールとしてというのもあるのですけれども、一つの目標として、オリンピックまでごみの減量化またはごみ対策を徹底して、オリンピックで出たごみもさらにできることで分別であったり、知恵を出して、ごみという視点でオリンピックに向けても対策を講じるし、福島市民のごみに対する意識、現状を変えていくきっかけと

も有機的に結びつけていくような何か持っていき方なんかをできれば、それはそれとして、単にオリンピックで終わる問題ではなくて、ごみに対する意識もオリンピックに絡めて変えてしまおうではないかというのは、すごく福島ならではのアイデアとしておもしろい発想かなと今ちょっと思いましたので。

【何事か呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員) 部長交代しまして、ごみの減量化に対する意欲がすごく強い文章か何か見たような気がしました。

(高木克尚委員長) 間接的な課題として大切だと思います。

(鈴木正実委員) 先ほど委員長おっしゃった持続性という観点ということでいけば、長野の場合は2つのキーワードがあったなど。1つはボランティア精神、これが20年たっても残っている。いろんな行事に積極的に協力してくれるというボランティアの心、それが残っている。これは、先ほど委員長おっしゃったようにこれから先の子供たちにも必ず必要になってくる部分である、あるいは大人にとっても、今のごみ問題もそうですけれども、ごみをきれいにするというその心構えというのが多分レガシーとしてうんと大事になってくる、持続性、継続性のある分野だろう。あとは、先ほど村山委員から話あったとおり、一校一国運動ということでの学校とオリンピックのかかわりも継続的に続けられていくのかどうか。この2点は、かなりオリンピック後のこれからのことを考えるのに大変参考になるお話だったのではないかなというふうに感じたところであります。子供たちが海外に目を向けていくという一校一国運動、これはこれからも継続的にやっていく、それが福島の子供たちが世界に羽ばたけるような、そういうきっかけにでもなったら一つすごいところなのだろうなという思いをこの長野では感じて帰ってきたところです。

(小野京子委員) 私は、ボランティア精神と今鈴木委員が言われたように、その中でボランティアやって人が育つということでしたということ、その意見が、声がすごく心に残ったのですけれども、やっぱりオリンピックを成功させるには住民総参加の協力があつたから、成功できたと資料にも書かれていたのですけれども、福島も何かにかかわっておもてなしとか、いろんなことにかかわれて、やっぱり福島市民の皆さんが何かの形で参加できるという、そういうオリンピックが大事なのではないかなと思いました。

あと、デンマーク料理を提供ということで、オリンピックの中に1日でも何日でも世界の、スイスの料理でも何かこういうものがあってオリンピックで食べたという、食ということもやっぱり子供たちも残るのかなという一つの案がここに出たなということで、それも検討してみてもどうかと思いました。

以上です。

(渡辺敏彦委員) 今出ていた話でそのとおりであります、職員大変だったなと思いました。江東区はこれからだからね。長野は実際やってみて、職員の方々いろいろ工夫してやってこられたという話

を聞きました。銭金の問題については答え出ないで終わってしまったのだけれども。これから、さっきの江東区ではないのだけれども、テーマとかアクションとかという組み合わせの中で、福島でも、福島でオリンピック開催ではないけれども、日本でやるのだよという感覚からすれば、職員の方々もさっき出ているように子供たちへの意識づけなり、あるいはボランティアの意識づけ等々について、さまざまな組み合わせの中で発想しなくてはならないという流れからすれば、職員の方が多分メインになっている企画をやると思うのだ。あるいは、ボランティアの取りまとめ等々もあると思うのだけれども、だから早急に職員の方、職員の体制というのかな、そういう体制しっかりと組んでもらって、我々これから特別委員会でいろいろ出していくけれども、それらも参考にしながらきちっとやっていかないと、非常に福島市の職員が苦勞することになるのかなというふうに思いました。

(高木克尚委員長) たしかあのときも、20年以上前の話ですから、当時はそういう感覚的に職員のサービス参加、責任も手当も曖昧な体制で長野市の職員はかかわったということで非常に驚きもあったのですが、今の時代きちんと職員は職員に仕事として、ボランティアだけに頼らないで、仕事としてかかわっていただくことも必要なのだろうと思うので、今渡辺委員がおっしゃったように、職員はどう体制を組んでいくのかということもやっぱり提言していかなければならないなと思います。併任辞令も何もないでやっているというので非常に驚きなのですが。

(小松良行委員) 確かに時代は20年以上も前のことということで、しかし感じたのは、説明している職員の皆さんのやっぱり誇りという部分、これをやり遂げたのだと、実際に副議長さんが借金ようやく返し終わったのだというお話で、まだ背負っていたのだというのでももう冒頭から驚きましたけれども、こうした一世一代の大事業をなし遂げたという誇りは、これこそ職員の皆さんあるいはこれにかかわった全ての人たちのレガシーになっているのだなというふうに大きく感心をしたところでしたが、あのときと今との時代の違い、例えば観光客はここらで何食ってもいいのしょうけれども、選手、関係者などは国際GAPを取得していない食品は今は食べられないのだろうな、あるいは日本でもおいしい牛肉は世界でもきっと喜ばれるだろうけれども、あれも私名前わからないですけども、国際規格があって、そういったものになつたものが国際的に評価されると、そういうものしか使えないとかというようなことになってきたときに、当時と大きく違っている中で、新たに気を使わなければならない、また農業にかかわる方々については、オリンピックを契機にどうなのだいというような話もするのですが、なかなかそっちのほうに思いが至っていない。実際にはソフト、野球だけで一過性に終わってしまうために大きな労力を割くわけにはいかないといった切実なお話もあったりしながらですが、やっぱりこういった機会にせっきゃく観光振興ということや福島の復興ということを私どもはもう一方で伝えていかなければならない大きな仕事なのだろうなと思っていますと、この点について、長野は長野、その当時の精いっぱい努めていただいた。福島ではどういったことができるのだろうなということをちょっと思いながら帰ってまいりました。

(根本雅昭委員) 私は長野で感じたのが、やはり食う、寝る、足が重要だというお話、先ほどもあり

ましたけれども、議会事務局の方にいただいた行政視察資料、こちらにも冬のオリンピック史上最高の組織運営で、これまで最高の大会であったというように当時のＩＯＣ会長から評価されていたというこの理由が多分輸送が特に大きな評価につながったということが印象に残りまして、例えば朝の通勤時間帯、20%交通量を削減したというお話、この中には事前にいろいろなテストの大会を開いて、そのデータを分析されて、信号なども操作して、アスリートファーストの精神で運営されたという物すごい努力が陰にあったのかなというふうに感じてまいりましたので、このように輸送関係も、さまざまな大会あつま球場でも行われていますけれども、そういうデータを人と物といろいろな動きを分析してオリンピックにつなげていくということが必要なのかなというふうに感じてまいりました。例えば輸送関係の交通ですと、市役所でもノーマイカーデーありますけれども、そういうところもオリンピックにつなげて、オリンピックに向けて公共交通機関を利用しようとか、そういうのもできるのかなというふうに感じてきた次第であります。

以上です。

(二階堂武文委員) 私も輸送が鍵というところが印象に残りました。今お話ありましたように警察の協力、企業の時差出勤、パークアンドライド方式の活用、インフラ整備等を挙げられました。私2点ほどこの話を聞いていて思ったのは、東京オリンピック開催都市ということでやっぱり巨額の予算が動いたと。それがインフラ整備を進めて、それが道路の整備とか、今まで渋滞していた道路に対する新しいバイパスなんか、そういうのを建設された、それが1つ。インフラ整備というのがやはり一つの長野のキーワードだったなと思いました。それによって競技会場も遺産として残ったと。それがその後の国際競技が開催されて、それが長野のスポーツイベント、長野というものをインフラ整備されることによって、誘致活動とか何かもすごくしやすい環境が整って今日まで至っているというところでは、これは、当然ですけれども、大阪万博なんか太陽の塔が最近になって注目されたりしていますけれども、やはり開催地というのは巨大なインフラ整備、金が動きますから、それが一つ遺産となって、その後の事業展開とか、地方都市の活性化にすごくやっぱり一つの資源となっていくというのは長野でもしかりだったなと改めて実感される所でした。

というのと、先ほど村山さんがおっしゃっていましたが、これは先日県のほうの説明があったときにちょっと質問したことでもあるのですが、お招きしたお二人ですので、その場でさらに突っ込んでということは、ちょっとそこで持論を展開しても失礼かなと思ったので、ストップいたしました。パークアンドライド方式、新たに道路つくったり、バイパスつくったりという、県のほうではそういった道路を整備するという予算はないというようなことを明確に言われていますので、そういった中でどういったふうに知恵を出してそれをやっていくことができるのかなといったときに、一つ鍵になるのがパークアンドライド方式というものを福島の実情に合わせてどううまく使っていくか。この間の県の答弁なんかですと、やはり駅に集めて、駅からバスでピストン輸送をするというような発想で、そうなるとその車を駅周辺にとめてしまうことになるのかなということになると、それが混乱

に輪をかけてしまう。平日であれば通勤とか何かにも支障出てくるとか何かということにもなりかねない。先ほど村山委員がおっしゃったようにやはり今車社会ですので、それを考えた場合、インター周辺に大きな仮設の駐車スペースを確保して、そこからあづま球場までのバスでのピストン輸送みたいなのを、新幹線と車で来た、高速を利用して入ってくる人を一つルートのにも輸送の仕方的にもパークアンドライド方式ということが福島の実情に合わせてさらに検討を深めていかななくてはならないのではないかなというのを長野の話聞きながら、福島のことをちょっと改めて思い返しました。

以上です。

(山岸 清委員) その案もいいと思うのだけれども、私も野球気遣いで、あづまも行って、楽天のドームも行っているのだけれども、チケット最初売っているわけだから、チケットで。だから、来る人数は大体わかるのだよね。それと、そのとき車で来ないでくださいなんて書いておけば来ないよ。大体宮城のコボスタは駅から歩いていくのだから。あと、きょうは楽天とロッテ郡山に行くのだよね。もう今は行かないのだ、楽天弱過ぎて。だから、福島の野球のカードにもよるのだよ。例えば韓国とやったりすると、在日韓国人の人がたくさん来るし、対戦相手のカードなのだよ。だから、アメリカと中国なんていったらどっち勝つか最初からわかるから、来ないよ。だから、やっぱりカードもあるけれども、余り私は心配していない。駅からピストンのバスでいいと思う。ただ、中には近場の人だと新幹線でなくて、例えば郡山あたりからなら車で来る可能性あるから、そのためのやっぱり高速あるいは駐車場に置いておいてやるとか、あるいは高速の近くでなくても福島交通の矢野目のバス置き場のところとか、競馬のときあそこにあるのだよね。だから、そこに集まってください、そこからバスで行きますよというふうに最初にチケットを買った人に教えて、あなたはどれで行きますかと大体、アンケートではないけれども、とっておけば、私は輸送はそうは心配しない。ただ、輸送に観客があそこのあづま球場の2万人か、2万5,000人だったか、それ満杯に来る、その反対、1万人しか来なかったなんていうと盛り下がりがだから、そっちのほうが逆に心配だね。そうなったら議員1人1枚ずつチケット買ってください。

ただ、あともう一つは、ナイターになるのか、これ夏だから、おそらく日中はやらないでしょう。それこそ救急車が何台も必要になるから、やっぱりナイターになると思うのだよね、あづまでやると。夏だから。そうすると、村山さんうんといいこと言ったのだけれども、ナイターになると夜今度福島の置賜町あたりの飲み屋ばかりもうかるのだよ。

あと、この間長野で聞いたのだからどうか、要するに汽車で来ると言ったね。宿泊施設、福島だけでなく、来る人は福島に宿泊も予約して来なければならぬけれども、それで回り切れないときは新幹線で東京に帰ってもらうのだ。

(小松良行委員) 日帰りしてしまうのではないの。

(山岸 清委員) 日帰りにはしたくないのだよな。飯坂温泉とか土湯、高湯あたりにぜひ泊まってもらいたいのだよな。だから、それをどうするかなのだよ。だから、逆に1回旅館にお昼ごろ来て、そ

ここで昼飯あるいは小昼でも食ってもらって、球場に旅館のマイクロで運んで、そしてまた帰りはここに来てくださいなんて集めてくるとか、あともう一つは、日本人ならよっぽどいいのだけれども、外国人の人が来た、そのときの対応はこれも、そっちのほうが大変かなと、こう思っている。在日の人だったら日本語もわかるけれども、逆に韓国からだったら近いからと、この間の冬季オリンピックに日本人が行ったみたいに、韓国とか中国から来た、そういう人にニーハオ、アンニョンハシムニカなんてくらいまで言えるけれども、あとはだめだから。

(渡辺敏彦委員) 今運行ルートとか何かの話出ただけけれども、子供も含め、選手とか、あるいは観客の人ってバスで運んだりするのだろうけれども、あそこって県のほうからまた銭出して道路直すとかって具体的に何にもないでしょう。そこの美化とか何かというのも何の話も出ていないでしょう。例えば看板立てて何しようとか、何も出ていないのね。だから、天皇陛下なんて来ると旗振ってみんなで子供らいたりするでしょう。そういう具体的な何かあってもいいのかなと。その時に福島にオリンピックの選手とか来て、小学生みんな並んで旗振ったぞとって30年もたってから思い出すのではないかなと思うのだけれども、何かそういうパフォーマンス的なことも考えてもいいのかなと思ったのだよね。

(山岸 清委員) だから、カード決まらないと。どこと対戦するか。

(渡辺敏彦委員) 日にち決まれば、夜やったのでは旗振れないから、だめだけれども。美化とか、本当に福島のアピールぐらい何かできるよね。選手とか観客で来る人らに対して。

(山岸 清委員) だから、選手が合宿で泊まった旅館のところなんかで、例えば飯坂なら飯坂小学校の子供らがこうやってアメリカが来るならアメリカ、中国が来るならと、国旗やって。

(渡辺敏彦委員) 万国旗だね。

(尾形 武副委員長) 長野市の、オリンピックを経験したということで、いろんな運営がすばらしく、ボランティアの取り組みが最初でスタートしたということで、すばらしい展開の説明を受けたわけなんですけれども、子供たちのかかわりというのは本大会においては全然できないということなものですから、デンマークとは事前合宿の選手との交流を主体にやっていますというような説明を受けました。2020においては、デンマークのホストタウンということで、水泳選手などに来てもらうということで、そういった子供たちと選手がじかに接するのは、事前の合宿しかないのかなということで、事前合宿に来たいろんな競技と市内の小中学生がいかにふれ合う機会を設けてやるかというのがすばらしい選手の姿を見る絶好の機会だなと思うので、ぜひ事前合宿に対する生徒とのふれ合い、それをちょっと考えていただければいいのかななんて感じてきたところであります。

(高木克尚委員長) 長野の振り返りで重要なのは、やっぱり迎えるべき福島市の体制をどう組んでいくのか、実際は競技内容がはっきりしないことには組めない、想定できない分野が多過ぎるのですけれども、何よりも職員、それから市民の方がどう体制を組んでかかわっていくのかという、そこへのアプローチを我々は訴えていかなければならないのかなと思います。その上で、輸送計画なり、子供

たちとのふれ合いをどこに見出していくのかということが我々、当委員会としても考えていく必要性があるのかなと。ただ、繰り返しになりますけれども、何よりも山岸委員が言ったようにチケット制なので、総体数は把握できるので、なるべく早く組み合わせが決定しないと想定できないというのもあるのですけれども。

(山岸 清委員) 野球の参加国は少ないから。ソフトのほうが多いくらいでしょう、おそらく。バドミントンはうんと多いのだけ。だから、うんと今人気上がっている。

(高木克尚委員長) とにかく最大数は想定した中で福島市はさまざまシミュレーションしなければならないということで、ここは訴えていかなければならないですね。

(村山国子委員) ちょっと想像がつかないのですが、チケットは販売するのですが、そのほかって福島でオリンピックやるというので訪れる人とかというのはどうなので、そういうのもあるのかなんて思うので、そういうのってないのでしょうか。どうなのでしょう。想像もつかないのだけれども。

(小松良行委員) パブリックビューイングつくるしかないのではない、駅あたりとか球場の近くに。

(村山国子委員) そういう効果もあるのかなと思うのですけれども。

(高木克尚委員長) 野球の感覚でいくと、チケットのない人は行かないね。

(山岸 清委員) チケットもらったって行かないよ。

(高木克尚委員長) 昔はダフ屋さんがいて、キャパ以上の人が集まってきて、入れるかもしれないということありましたけれども、今ダフ屋さんはあり得ないので。

(山岸 清委員) ダフ屋だって人気のあるカードでないとダフ屋も出てこない。

(高木克尚委員長) チケット購入者以外の福島市の来訪者というのは。

(村山国子委員) 考えなくてもいい。

(高木克尚委員長) これも推進室にちょっと聞くしかないですよ。

(沢井和宏委員) 今に関連して、カードが決まらないとあれなのですけれども、万が一日本の対戦だった場合に、パブリックビューイングあたりが例えば陸上競技場あたりにでっかいのがあるのです。だから、あそこら辺使って、そういうのも日本でないとなかなか難しいとは思いますが。

(高木克尚委員長) オリンピックは商業行為なので、金もうけにならないサービスはやりません。

(山岸 清委員) 金もうけになってはならないのではないの。

(高木克尚委員長) 金もうけですから、チケット販売そのものが。ただ見をさせないというのが基本原則なので、パブリックビューが実際できるかどうかというのはちょっと。

(小松良行委員) そこは期待しているのです。球場に入れなくてもたくさんいるでしょうし、それこそ先ほど言った球場でも構いませんけれども、あとは福島駅のそれこそ東口をだんと歩行者天国にして、今言うでっかいパブリック、そうすると訪れた人たちもそこで飲み食いもするでしょうし、こっち勝手連的に、これはやりようなのだろうか。

(高木克尚委員長) 一般放映を見るなら、これは誰でも可能なのですが。一般放送を見るための

そういう施設をつくることは可能でしょうけれども、それ以外の放映は多分禁止されますから。

(尾形 武副委員長) 一般放送をオーロラビジョンで放映する。

(小松良行委員) そうそう、そうそう。

(高木克尚委員長) では、パブリックビューの設置をどう考えているのかという検討は申し入れる。

(渡辺敏彦委員) 設置しろと言えばいいでしょう。するべきだと。

(鈴木正実委員) 長野で出ていた言葉でテストイベントという言い方ありました。1年前なりなんなりにその辺に準ずるような競技会、大会というのを持ってきて、どこまでシミュレーションできるのかというのはありますけれども、やはり世界選手権の1試合持ってきて、どういう動きになるのかとか、1年前、要するに来年ですよ。来年そういうものを持ってくることができかどうかというのは、もう動いていないとできないと思うのです。今回6月の23日に日米ソフトをやるのだといっても皆さんご存じないように、やっぱりPRの仕方から含めて、1年後のテストイベントを絶対盛り上げていくのだというような動き方をまずやっていかななくてはならない。そのためにもテストイベントをやるのかやらないのかというよりも、やってもらいたいと内心思っていますので、そのあたりも強く要望していただければありがたいというふうに。

(高木克尚委員長) 芝張りいつからいつまでかかるって言っていましたか。やっている暇ない。

(鈴木正実委員) 同じ会場でということは多分できないのではないかと思います。ですから、例えば十六沼でソフトをやって、野球はまた別なところ。

(山岸 清委員) 信夫ヶ丘。

(鈴木正実委員) 信夫ヶ丘できるかどうかですけれども、そういうような考え方で何かできないかということはやるべきではないかなと思います。

2019年度内の完成なのですね、あづまは。改修工事は。だから、来年度に完成するというのであれば。

(高木克尚委員長) 当然あづま球場のテストイベントだとすれば、県に要望していかなければならないですけれども。

(鈴木正実委員) その意味では、早く改修工事が終わるということも大前提になるのかなと思いますし。

(高木克尚委員長) 今鈴木委員がおっしゃられたように、あと先ほど来皆さんから出ておりますように、事前のテストイベント等をやらないと、あらゆるシミュレーションが想定できないということであって、これは大切なことだと思いますので、具体的なシミュレーション、どう考えるかということは提言していきたい。

次に、七尾市についてご意見をいただきたいと思います。

(小松良行委員) そもそもこうした観光振興というか、絡めて、こういった合宿誘致を市の取り組みとして大きく進めていると思います。ああいった地域において人を呼ぶと、和倉温泉という日本でも

冠たる温泉はあるとはいえ、やはり衰退している状況というのに必死に取り組まれているのだなというのをまずもって感じましたが、今回オリンピックのそういった招致等々にはそういうのは余り熱心ではなかった、当然観光協会が運営に大きくかかわっているところであって、過度な負担、あとは年々利用者数もふえてくるという中においては、そこまではということだったのでしょうけれども、1つここで感じたのは、福島市も3温泉地を抱えている中で、それぞれの観光協会の中でこういった合宿プランというのをどういうふうにパッケージを考えているのか、お客さんうんと来るといいなでなくて、こういうことで学生さんや、あるいは国際大会でも何でも来たときに私らこういうおもてなしができますよ、こういうパッケージプランがあって、そこにおいて、今福島もコンベンション推進室のほうで補助事業など県と連携してありますけれども、さらにそういったものを、こういったオリンピックという大イベントですから、拡充をしていながら、温泉協会あるいは商工会とかいった、そういった方々も何してくれるの дайでなくて、どういうパッケージ、取り組みができるのかというようなところは、こちらからもいろんな要望をしながら、こういうことだったらうちの飯坂温泉協会でもやれるよねとか、土湯でこういうことやれるよねとかといたら、やっぱりみんなが参画する中にただただ手広げて待っているのではなくて、向こうから出してもらうというか、積極的にそうした参画していただくような声かけをやっぱり観光協会のほうにもしていくべきだろうと思うし、早急にこれをやるべきなのかなというふうに思ったのですけれども。

以上です。

(山岸 清委員) スポーツ合宿、あの視点は非常にいいと思いました。だから、福島も温泉地これだけ抱えているのだから、そこが合宿適用するかどうか、やっぱり料金もあるから、1泊料金も安く設定して、ただ空部屋、布団部屋にしておく必要はないわけだから、ある程度人が来て、そこである程度の利益が上がるようにスポーツ合宿をすると、それにはやっぱりそれをする場所、例えばサッカー場とか、あるいはラグビー場、競技場、これらの整備も必要だけれども、ただ、合宿だから、そんなに観客席とか設備には要らないと思うのだ。あと、ラグビーとかサッカーは、雨降っても雪降ってもやるから、喜んで。泥だらけになってやるのだから。だから、野球なんかと違っていいから、ある程度そういう設備がかからない、そういうスポーツを誘致できるような場所も受け皿として、観光協会もそうだけれども、やっぱり市としても考えて、その運動場はやっぱり今度は福島の児童生徒が活用できる。だから、今度相撲取り、荒汐部屋の若隆景とか、やっぱり相馬にばかり来ているでしょう。だから、福島にもせっかくできたのだから、相撲場もあるし。

(鈴木正実委員) 七尾市そのもの合宿ということで、施設、やっぱりあれだけの競技施設、練習施設が必要なのだ、まず大前提としては。福島の場合まず一番考えられるのが十六沼スポーツ公園の整備ということで、天然芝のサッカー場、いい、悪いはまた別問題としても、改めて2面できる、人口芝も1面できるということで5面体制になる。ソフトボールコートが4面体制で、国際規格に合っているのだと、こういうところがまず強みとしての一部になるだろう。すぐ近くにそれを補完するような

意味合いでのというわけではないですけども、道の駅ができて、飲食施設ももう近くにできるという事で、かなりアピールポイントは高くなっているのだろうなど。その段階で、七尾市みたいに1つの組織があつて、そこがもちろん営業を一生懸命かけなくてはならない、このところが大事で、この期間が何も福島というのはないのだろうなど。旅館とこの会社、施設とこの会社という、この真ん中にある非常に重要なところがない。これは、オリンピックが終わった後のレガシーの継続であつたり、施設の継続、福島市というオリンピック開催地を今後ずっと未来まで続けていくためのそういう新たな組織というのが必要になってくるのだろうなどというふうな思いを非常に感じました。

(高木克尚委員長) 運営母体ね。

(鈴木正実委員) ええ。なおかつ旅館協同組合あたりが指定管理者になって全部管理をするという、この考え方ができる旅館組合あるいは観光協会がどれだけあるかというのが多分福島の場合は重大なポイントになるのだろうなどという感じがしました。そこでも新たなそういう組織づくりのための観光コンベンションあたりでの創業の視点でいろいろ指導していくとか、そういうことが今後はオリンピック後を見据えて必要になるのではないかなという、そこは非常に感じたところです。

(村山国子委員) 施設がすばらしくて、おもしろい発想だなと思いました。七尾市を知ってもらおうという意味では、人口交流もあつて、一役買っているなどと思いました。基金が市と民間で積み上げていると、あそこにごくびっくりしたのですけれども、そういうのできるのだなというのが。

あと、皆さん十六沼と言っていますが、私一番ひっかかったのは、スポーツ合宿の場所が市民が優先で使えないというのが、せっかく物があつても市民が対象ではなくて、スポーツ合宿のための施設だというのがあつて、皆さん十六沼さっきから出ていますが、あそこは教育委員会の施設ですので、スポーツ合宿には該当しませんので。

(小松良行委員) 市民優先、それはそうだ。

(村山国子委員) そうです。あそこは社会教育の場ですので、十六沼は頭から外してください。

(鈴木正実委員) 運営のあり方ではないの、それは。

(小松良行委員) うまく日程調整をしながらね。

(鈴木正実委員) 運営のあり方だし、考え方だと思います、そこは。

(村山国子委員) でも、やっぱり市民は優先されるべき部分というのもあつてもいいので、十六沼については、今は社会教育もあるし、結構十六沼って東北一円からすごくサッカーとかつて訪れているのです。だから、スポーツ合宿と、そういうものではなくて、飯坂温泉とかとの連携を考えるのはいいのかなと思いますけれども、あそこをスポーツ合宿の施設にしようとかというのはちょっとまた別に考えるべきかなというふうに思いました。

(小松良行委員) 何とか折り合いをとって。

(鈴木正実委員) それは、今は事実だけでも、変えていくことは可能なので、できないと初めから思っていたら何にもできなくなってしまうというふうに私は思っているの、言っている次第です。

(小野京子委員) 今話題になったスポーツ合宿というのは、本当に今回七尾市見て、やっぱり泊まりながらスポーツやるのが大事だと。あれだけ施設持っていることもあるので、福島市も今回オリパラやる中でそういうものを今後考えていくべきだと思います。やっぱり旅館協同組合の連携ということで、合宿のサポートも大事だったということがあるので、旅館の方々の協力も必要だなということを感じました。

あと、PRもやっぱりシニア層をターゲットにしたものを、値段を下げて学生にも声かけるようにしたということもあるので、ターゲットの変更によってもそういうふうな誘致活動もできるようになったのだなということを感じました。

以上です。

(渡辺敏彦委員) 皆さんのおっしゃるとおりです。やっぱり和倉温泉とのタイアップのスポーツ合宿についてはすごいなと思って、今十六沼とか何かの話も出たのだけれども、決まりなんていうのはみんなで直せばあれなのだろうけれども、ただ市民が困るようでは困るのだけれども、今言ったあづま球場もなかなか大変だかもしれない。十六沼もある。体育館も新しくなる。やっぱり土湯温泉、あづま球場に近かったり、飯坂が十六沼に近かったりするから、そういったことについても模索していく必要があるのかなとは個人的には思います。あと、これ福島市も飯野町と合併したのだけれども、合併特例とかいろいろあったはずなのだけれども、合併特例と過疎債使ってつくってしまったでしょう。福島もったいなかったなというふうな思いがあったでしょう。今後は伊達市とか、川俣町とか、飯舘村とかいろいろあるのだけれども、将来どうなるかわからないのだけれども、万が一そういった状況になったら、そういったものがあるのであれば、スポーツがなじむかどうかかわからないけれども、将来的に、俺もレガシーという言葉いっぱい使っているけれども、合併したときにつくったのだよみたいな、そういった部分に使えばいいのかななんて変な思いをしながら帰ってきました。

(高木克尚委員長) 全くそのとおりで、福島せっかく中核市になって、これから連携中枢都市圏構想の中に絶対スポーツ施設は組み込まなかったら立ち行かないです。

(根本雅昭委員) 七尾市で印象に残ったのが、やはりこれだけサッカーの合宿を誘致して活動されていてもさらにターゲットを絞って誘致活動をされているということが印象に残ったのですけれども、サッカーで平成28年度ですか、実績で81.4%で、テニスが3.6%で、非常に少ない割合ではあるのですけれども、今後を見越して、シニア層をターゲットに温泉の旅館協同組合と連携をして、しっかり組織立てをして、足で歩いて誘致活動をしているという、こういう地道な活動が重要なのかなというふうに感じてきました。

以上です。

(沢井和宏委員) 皆さんがおっしゃったとおりなのですが、1つ私感じたのは、地理的に七尾ってかなり行くのも我々も時間かかったし、そんなに便利のいいところではないのだけれども、これだけの人が来ているというところをやはり考えなくてはならない。やっぱりそれだけ時間かかって

行く価値のある場所だったということなのだと思います。逆に考えると、福島なんか交通の利便性は日本全国考えたとき首都圏からはすごく近いところなので、逆に近過ぎて、宿泊しないで帰れるという、そのぐらいの話なのですけれども、やはりそこの利便性のよさを売りにしながらもう少し福島をPRしていくべきなのだろうなと思うのです。このスポーツ施設だけではなくて。感想です。

(二階堂武文委員) 私もちっとデータいただきましたが、平成28年度の助成額1,854万円余の中で、種目別ではサッカーが81.4%、その9割が高校生。ただ、高校生は余り金にならない。酒も飲まない、宴会もやらないから、金にならない。それと、もう一つは補助金申請の地域別実績、関西が32.3%、次いで北信越が28.4%、3分の1、3分の1、関西と北信越というところから皆さんはあそこまで足を運んでいらっしゃるというデータをいただきました。先ほどもありましたが、十六沼にしても市内の施設にしても余りにも交通の利便性がいいから、みんな日帰りで行って来てができる。泊まるメリットというのがうまく利用者に伝えられるような企画が旅館の皆さんと行政が一体となったいろんな助成制度があったり、フルーツ、果物ができる季節であったら優待特典とか何かもううまく組み合わせたりなんかして、魅力アップを図れるようなプランづくりみたいなというのは、福島ならではの实情に合わせた、日帰りでのスポーツ利用のお客様を宿泊していただけるようなアンケート調査みたいなのもきちっと、日帰りで帰っていらっしゃる皆さんがいろんな条件を整えば、福島を宿泊地として選んでいただくための条件整備なんかで希望される部分とか何かあればリサーチしてみるとか、そういう努力も福島必要なのだろうなという気はちょっといたしました。

あと、魅力の中で1つありましたサッカーが81.4%という魅力の中で、何でサッカーが81.4%なのかといったときに、合宿のメリットとして5番目に挙げてありましたが、全国の強豪校とサッカーの試合ができることというのが5番目としてありました。逆に言えば、十六沼なんかでもユナイテッドのサッカーチームと交流ができるようなものも一つの特典としてうまく絡めていくとか、それは先ほど言ったような魅力づけを、どういうふうに福島ならではの魅力づけをプランとして考えていけるかということにもかかわってくると思うのですが、その辺あろうかなという気はちょっといたしました。

(尾形 武副委員長) 七尾市のメリットの中で、市も助成金を出しているのです、一人当たり千円ということで、1泊。そういった意味では、行政も非常に力を入れてますし、温泉もそれに呼応して一生懸命頑張っているという姿をかいま見ました。そういった意味では、行政のやれることというのは、条件整備をきちんとすることによって、周辺の温泉協同組合の方々もやっぱりそれと一緒にあって共同でプロジェクトが立ち上がらないと、なかなかスポーツ合宿やりましようと言っても受け入れ側と仕掛ける側と一緒に進めていかないとだめだなというところを感じてきました。そしてまた、こういった施設は茨城県の波崎とかにも広いサッカー場施設があるということで、だから何のスポーツをターゲットにやるのかという事前のリサーチといえますか、事前調査も必要になってくるなということも思いました。福島市は交通の便もよろしいですし、いろんな天候、天気、自然環境もよろしい

ですので、何でもできるはずですので、そういった意味では今後大いにスポーツ合宿をやるためにも価値はあるところですので、いろんなスポーツがありますから、それらをターゲットを絞って取り組めばかなりいけるのではないのかなという気はしてきました。

(二階堂武文委員) ちゃぶ台返しになるかもしれませんが、そもそも単価の安いスポーツ合宿を誘致したいと旅館側が思っているのか、七尾市の温泉街ですから、へんぴでお客様もなかなか呼べないから、単価安くてもいいから、高校生を呼ぶと、そういった必死にならざるを得ない環境があったと。でも、福島の旅館さんは実は結構皆さんいっぱい、稼働率結構震災の状況からだんだん戻ってきて、稼働率いい状況の中で、何を好きこのんで単価の低い高校生を入れる必要はないですよ。マーケット事情ってどうなのかというのは、根本的なところであるかもしれません。

(鈴木正実委員) 今のおっしゃること十二分に理解できます。ただ、我々今考えているのは、オリンピックをやったまちとしての考え方という、そういうところが前提になるのだというふうに思うのです。そのときにこれが一つの資源になっていって、合宿であろうと何であろうとオリンピックシティーの福島に来るというまずそここのところ。一番そこで注目しやすいというのがオリンピックでやった野球、ソフトの合宿地というふうになっていくのが考え方とすれば一番素直な今回の視察のテーマに沿った考え方ではないのかというふうに私は思っているのです。ほかの競技もいっぱい何でもあるよというのはまた別の問題にならないかなと思うのですが。

(二階堂武文委員) 多分それにはやっぱりちょっと魅力づけが、長野とか何かと違って、そこが開催地で、常設で冬季オリンピックがその都市で開催されたとかと実情がまるっきり違って、一、二試合という薄い、どこまで周辺都道府県の皆さんの記憶に残せるかといったときに、多分地元の方であればしばらくの間はここでマウンドに誰かが立ったのだよねとかというのは残るかもしれませんが、そういった意味ではオリンピックというネームバリューを資源として生かせるかどうかというところに対しては厳しいものがあるのかなというのは、それはご承知のところかと思うのですが。

(鈴木正実委員) 確かにそうで、そこでスポーツの健康づくりの福島市ということが徐々に位置づけられてくるというふうに思うと、やっぱりそこでオリンピックで野球、ソフトをやったまちだ、そこからスポーツのまちだというふうになっていって、今言った合宿のその他の競技をやる。その中でも例えばターゲットを絞っていくのだという話がそこから先出てこなくてはならない話になってくるのだと思うのです。ですから、まずは入り口はここだという、入り口のここの部分をもうちょっと精査をして、あと合宿いろんな形でやっていきたいと思いますという、そういうパターン。それを仕掛けるところが絶対なくては、今こうやっているいろんな意見言っていますけれども、それを具現化する何か組織がないとできないわけです。それが多分この七尾でいうとスポーツキャンプという、そういう株式会社があるから、うまくいっているのだと思うのです。

(二階堂武文委員) おっしゃるとおりなのです。今鈴木委員がおっしゃっている考え方を生かせるベースがあるのかと、福島に市場があるのかという、根本的な、客観的な下地がないところで議論し

でもエネルギーがちょっともったいないので。というのは、そもそもありましたが、何で今回七尾市がこういった動きに出たかといえば、平成16年の市町村合併に伴い、地域に体育施設が複数存在することとなり、プラス市内和倉温泉の一部の旅館がスポーツ合宿の受け入れを開始したことがきっかけとなっている。ということは、下地があったわけです。だから、先ほど来出ていますように距離的にもなかなかお客さんを、有名な日本一の旅館ならまだしも、小さい、客単価が低くてもいいという旅館さんにとってみれば、あいている部屋を埋めるのに多分皆さん四苦八苦している中で、スポーツ合宿と、これはいけると、やり出したところがあるから、これ広めていこうではないかと。だから、そういった下地があつての話なのです、出だしからして。そういった意味では、今回は私ども各温泉、飯坂温泉であったり、高湯であったり、観光協会の役をいただいてきたりしますけれども、そういった受け入れる下地があるのかという部分も客観的なデータとして押さえた上でのというのはしていかないと何か努力が報われないなというか、感じました。

(鈴木正実委員) あとは堂々めぐりみたいになるのでやめます。

(高木克尚委員長) 今ある福島市の環境、あるものをどう活用するかという視点が大切だし、将来に向けて温泉街の方々が協力いただけるのかどうか、当然客単価というのは避けて通れない課題です。ただ、客単価とスポーツ合宿の誘致は本当に相反する視点に落ち込むので、やはり原点に戻っていただいて、スポーツのメッカとしての合宿プランは一つ福島市もってほしいと、そんな思いをこれから熟成するためには、これは鈴木委員ほかからもたくさん出ていますけれども、実際誰が企画をし、誰が運営をするのか、そこをきちんとみんなで取り上げて議論していきたいなど、こんな思いでいかがでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、江東区、長野市、七尾市それぞれご意見たくさんいただきました。正副委員長のところで少し整理をさせていただいて、改めて皆さんにお諮りしていきたいなど、こんな思いであります。

では、行政視察の振り返りについてこれお話ししたいというのがあれば何か。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、ただいま申し上げましたように正副委員長手元でちょっと整理をさせていただいて、その後また皆さんにご意見をいただくようになると思います。

次に、その他を議題といたします。

今後の日程についてですが、現在議会改革検討会に諮問されております意見交換会の実施要綱と委員会条例の改正については、今後答申がなされる予定になっております。答申内容によっては、6月定例会議に委員会条例の改正案が出されることも想定されます。委員会条例が改正されれば、意見交換会に向けて開催方法などを検討するために速やかに委員会を開催していきたいと思っておりますので、皆様に今後の日程についてお諮りをさせていただきたいと思っております。

6月のご承知のように6月定例会議もありますし、終了後には各地区で自治振興協議会が開催される非常に忙しい月でもあります。調査しましたら唯一あいているのが6月21日なのです。6月議会終了後です。どうですか。6月21日、あいていますか。

【「大丈夫です」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、6月21日に行いたいと思いますが、午前と午後どちらがよろしいですか。

【何事か呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、10時ということで日程の確保をお願い申し上げます。

正副委員長からは以上ですが、その他としまして皆様から何かあればご発言をいただきたいと思えます。

(鈴木正実委員) 県の教育委員会のほうでオリンピック・パラリンピック教育という冊子をつくりまして、ことし3月にもうまとまっているのです。いろんな小学校、中学校での取り組み、こういうのも市におりてきて、市のほうでも具体的にこの中からどうしようかなんていうことを考えているのかなのですけれども、これも我々に必要な資料になるのではないかなと思いますので、できれば教育委員会のほうから……

(高木克尚委員長) 資料請求したいと思えます。

(鈴木正実委員) ぜひお願いをしたいなと思えます。

(高木克尚委員長) あと、この前の視察で訪れた江東区から1冊だけ実践報告書をいただいていたのですが、結構厚いのだね。

(山岸 清委員) 委員長、副委員長でよく読んで報告してもらおう。

(高木克尚委員長) では、お預かりしておきます。閲覧希望の方はいつでも言ってください。

そのほかございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) なければ、以上で本日の東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を閉会いたします。ご苦労さまでした。

午前11時31分 散 会

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員長

高木 克尚